

トピックス

1. 播州日誌 NHK 朝ドラ らんまん
2. 新連載 社労士 野口亮がゆく



福留経営労務管理事務所  
姫路龍馬会  
社会保険労務士・行政書士  
福留章

# 龍馬通信

No. 65

2023年 5月号

立夏～小満の候

透明な風を抱いて。

新緑の季節

優しく穏やかな春を過ぎて  
力強く エネルギッシュな初夏  
青空に白い雲  
爽やかに澄み切った風に吹かれて  
人々は 北に南に 東に西に  
行楽の季節 黄金週間



コロナ禍を耐えて  
人々は喜びに満ちて  
動き始めた 堰を切ったように

久しぶりのイベント 祭りやコンサート  
マスクからも解放されて  
輝くような表情が はじける

夏も近づく 八十八夜

目に青葉 山ホトトギス 初鯉  
さっぱりとした味は 関東で 喜ばれる  
関西では 脂ののった戻りカツオを 良しとして  
暑い夏をやり過ごし 秋を待つ

透明な風に 頬をなぶられながら

初夏を楽しもう  
つかの間の 幸せを つかみ損ねてはいけない  
しっかりと 胸に抱いて  
厳しい夏に備えよう





# 播州日誌

NHK 朝ドラ 「らんまん」 始まる

主人公である、牧野富太郎は世界的に有名な植物博士である。土佐の高知の五台山には、牧野博士ゆかりの植物園がある。五台山と言えば子供の頃の遊び場であり、デートスポットであった。標高300m程の低山で市民にとって手軽な憩いの場でもあった。山頂からの眺望はなかなかのもので、鏡川が浦戸湾に流れ込み太平洋へとつながる。桂浜も遠望できる。ペギー葉山が歌って大流行した「南国土佐を後にして」の歌碑があり、前に立つと曲が流れる。植物園は山の中腹にある。その存在は知っていたが、世界的に有名な先生のゆかりの植物園であることは、かなり大人になってから知ったことだ。小中学校で教わった記憶もない。だから五台山に行っても植物園はいつも素通りであった。多くの市民も大方その傾向にあった。一部の植物好きにとっては、とてつもない宝物のような存在だったのだろう。

今、ドラマは富太郎（ドラマでは万太郎）の幼少期、少年期を過ぎて青年期に入り、峰やという造り酒屋の家督を継ぐか、植物探求の道に入るかの瀬戸際のところである。すさまじい葛藤（かっとう）の末、結局は学者の道を選ぶことになるが、それにしても、植物への愛情は半端なものでなく、かといって学者への道といっても、櫓舵なき船の大海に乗り出す感じではあったであろう。

毎回感動的な場面があり、ドラマ構成の見事さに感心する。さらに中で使われる土佐弁の見事さは、懐かしさとともに役者さんの努力に感服する次第。ともあれいつもは見ない朝ドラに、すっかりはまってしまい時間を捻出している毎日である。今後の万太郎の人間的な成長と珍しい草花との出会いが楽しみである。



2023. 4. 27

## ～南国土佐を後にして～

### 第10回 「高知編」

### 「青春賛歌」

「青春」とは何時から何時までを言うのだろうか。中学から高校、大学までを言うとしたら高校3年生の頃は、青春真っ只中ということになる。昭和41年 1966年 高校3年生 18歳。青春とはなんと、儂く、うれしく、優しいものだろうか。私の青春は二人の女性によって彩られている。中学時代のJNさんと高校時代のTYさん。いずれもプラトニックではあったが、高校時代の恋愛は色濃く、あれこれのことが今でも夢にでてくる。高知城、五台山、桂浜。姉さんが住んでいた須崎。思い出の一つ一つがああ頃の幸せに満ちた時間につながる。会うと別れが苦しく、会わなければすぐに会いたいと思う。2年生から3年生になる春休みに修学旅行があった。東京組と九州組に分かれる。もちろん示し合わせて九州を選ぶ。

前半の南九州は雨にたたられ、ずぶ濡れの観光。日南海岸や鹿児島。後半は天気が回復して快適なバス旅行に。熊本、長崎に遊ぶ。記憶が定かでないが白菊温泉？に宿泊した。食事を終えてみんな食後の時間を楽しんでいた。規則違反ではあったが、周りのみんなの応援で二人こっそりと旅館を脱出して、温泉街の喫茶店に行った。喫茶店そのものへの出入りが禁止されていたのだから大変な規則やぶりであり、ドキドキの連続であった。喫茶店といっても食堂に近い感じであったが、そこで飲み物と卵サンドを注文した。どれほどの時間が経過したものやら言葉少なに会話をしたが、二人きりになれた喜びと規則違反の後ろめたさが一緒になって、二人は熱くあつく燃

え上がり言葉少なに見つめあうしかなかった。薄い T シャツにカーディガン。あの夜のことは一生忘れられない。「また一緒に来たいね」「私も、必ず来たい」そんな会話がよみがえる。どうやって旅館に滑り込んだか、今はもう思い出せない。

鹿児島で買った生パインアップルをどうしても両親に食べさせると言って、必死になっていたことも忘れられない。家に持ち帰った時には熟れすぎてまずかったそうで、そんな天然な彼女が私にはあっていたのかもしれない。進学組に進んだ私と就職組の彼女とは 3 年生の時は組が別々になった。今の時代のように連絡が取れない。あった日に次の日を決めるようにして 1 年間デートを重ねた。

この年ミニスカートが大流行、全日空羽田沖墜落事故、ビートルズ来日、札幌オリンピックの開催決定、中国文化大革命など。函館の女、恍惚のブルース、悲しい酒、霧の摩周湖、柳ヶ瀬ブルースなどがヒットした。

高校生活もあと少しという頃、受験勉強もろくにせず日を過ごしていたのだがクリスマスイヴの日。仲間 7~8 人で酒を飲んだ。運悪く喫茶店にいるところを巡視員に見つかりその首謀者として学校に通告された。初めての停学 2 週間、父兄召喚。ちょうど冬休みだったこともあり全般的には目立たなかったものの、高校時代のそれまでの功績はすべて帳消しになり、母親はもったいないと涙を流した。体育系の先生には、「おまんが酒飲んで捕まるとはにゃ、おまんは男じゃ見直した。」と半分冗談みたいに言われた。わずか数か月だったけどおとなしく受験勉強するきっかけにはなった。次号は大学受験いよいよ「南国土佐を後にして」東京へ旅立つ日が近づいてきた。



## 新連載 社労士 野口 亮 がゆく

顧問先訪問には、三つほどのパターンがある。リクエストに応じて、アポイントを取って、そして定期訪問。定期訪問は月 1 回の訪問日を決めている場合。安全委員会や安全パトロール、安全ミーティングなどはあらかじめ次回開催日という形で、前月に訪問日が決まる。

野口のスケジュール管理は、白板と手帳で、流行りのスマホ管理は苦手だ。社労士の 4 月は多忙だ。コロナの規制緩和もあって、人の動きが活発化している。入退社のデリバリーがやたら多い、そして 36 協定や 1 年の変形労働時間制の協定と届け。今年の最高は 1 事業所で入職 22 名、退職 18 名。急ぐのは入職者の社会保険の資格取得と退職者の離職票ということになる。1 日でも早く保険証が欲しいだろうし、失業保険の受給を急ぐ人が多い。息子と 2 人の事務職員で大体は片付くがその他の仕事も重なるので多忙を極める。

白板を見ながら今日の予定を確認する。労基署で宿直従事者の「減額申請」の許可書を受け取ることと、A 事業所の雇止めの事例で「会社都合にしてくれ」と執拗に粘っている従業員がいて、どうしたらいいかわからないという社長からの依頼を受けての、事業所訪問の 2 件である。約束の午後 1 時に A 事業所に入る。余り早いのも迷惑だろうが、やはり 5 分前には入るのが礼儀だろう。若いころからこの習慣は続いている。ひと通りの挨拶と世間話の後、本題に入る。B さんは勤務歴 2 年。有期雇用 6 か月を 3 回更新し、3 回目の更新の時にあらかじめ 6 か月先の更新はしない旨の通告をしていた。これも野口のアドバイスではある。

解雇、退職勧奨については、トラブルが多いが基本的には、戦力なのか戦力外なのかを重視する。有期雇用はいわば、解除条件付きの契約であるから要するに従業員の更新が当たり前という思いにならぬ前に、その期待感を薄めておく必要がある。モチベーションのこともあるが、最後の更新時に次の更新がないことを、明確にしておくことがベターだと思う。

B さんはスマホか何かの情報で、解雇や退職勧奨、会社都合退職が退職理由だと失業保険が早くもらえる、たくさんもらえるということで、退職理由にこだわっているようだ。

雇用保険は通常 14 日間の待期期間と 2~3 か月の給付制限がかかる。解雇、会社都合等の場合だとこの給付制限がなくなり、基本手当の支給日数が増加する。大企業がリストラ（大量解雇）するのに都合の良い制度で、

中小零細企業では、この制度があるためにBさんのようなケースが多発する。自己都合はわがまま勝手な退職であると決めつけているが、自己都合の中には、やむにやまれずという場合も多い。さらに会社都合の退職者を出すと、助成金の支給申請ができず申請中の助成金は不支給となる。

本人不在のため事業主へのアドバイスにとどめたが、結局事業主としては、あくまでも有期雇用の期間満了に

よる退職ということで処理するように指導。根拠は最後の更新の時の契約書に、次の更新がないことを明記しており、その理由についても開示していることである。Bさんとよく話し合うことを進めて訪問を終えた。

帰途、労基署によるために車を進める。すっきりとしない気分である。何度このことでもつまずいたことか。行政のやることは中途半端で遅い。

(政府は、今年度になって、給付制限の撤廃を含めた法改正の方向を打ち出した。)



## 創作 ショートストーリー 土佐のしば天

正確には、芝天狗(しばてんぐ)。要するに土佐に住み付いた妖怪である。このしば天、川や池や沼の近くに住んでいる。夜な夜な通行人をからかったり脅かしたり時には話し相手をしたりして暮らしていました。しば天は、妖怪であることに誇りを持ち、勧善懲悪を信念にして生きておりました。

さてさて、いつの時代のことやら、ここらのならず者で甚太(じんた)という者がおりました。これがなかなかの遊び人で、家族を路頭に迷わせ、隣り近所に迷惑をかけ、怒ると烈火のごとくになって暴れまわる。世間の人は「悪甚太(あくじんた)」と噂して恐れておりました。その噂を聞いて、しば天は、いつか懲らしめてやらねばと思っていました。

折もおり、甚太が相変わらず、ばくち場からの帰り道。したたか酔って、ふらりふらりと、池のそばを通りかかる。いい所へ来た今日こそはとしば天、甚太の前に立ちふさがって一言。

「おんちゃん、すもう取ろ」 びっくり仰天の甚太、しかしよく見ると、けったいな姿はしているが、小さくて子供のよう。そんな様子に安心したか甚太。

「おんしゃなんなら」「おら、しば天よ」

「おんちゃん、すもとろ、とろうちや」

相手にとって不足なし。「よっしゃ、かかってこい」

どんとぶつかって組んでは見たが、何しろ相手は河童の一種。体がぬるぬるしていて、掴みどころがない。なかなか勝負がつかない、やがて夜が明けて、あたりが明るくなってきた。

通りがかったお百姓。甚太の様子を見て

「甚太はどうしたがぜよ」「一人で、やぶの中で動き回りゆう」

「トゲやなにやで、血まみれになっちゅう」。

流石の甚太も、この夜の出来事に懲りて、少々行いを改めたそう。

「よかった、よかった、まっことよかったぜよ」

